

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第562号 平成25年6月19日

## アカンタビリティとガバナンス

一般的に「アカンタビリティ」は説明責任と、「ガバナンス」は統治能力とそれぞれ訳されていますが、今回の「飛ぶボール問題」は、まさしくこの「アカンタビリティ」と「ガバナンス」を考える格好の材料を提供してくれました。

問題は、現在プロ野球が使用している統一球について、日本野球機構（NPB）が統一球を密かに飛ぶボールに変更していたというもので、それが事実なら、NPBは、プロ野球選手のみならず野球ファンをも裏切ったといわざるを得ません。

先日（6月12日）、この問題について加藤良三コミッショナー、及び下田事務局長が東京都内で記者会見しています。

その内容は、新聞報道等を総合すると、

- ・統一球は2011年に導入されたもので、その際、規則に定められた平均反発係数の下限に合わせるよう製造された筈だった。
- ・しかし、検査の結果下限を下回るボールがあった為、昨年9月から製造元のミズノ社と調整について検討した。
- ・同年10月にNPBの下田事務局長がミズノ社に発注したが、「新旧のボールが混在する実態が明らかになれば、現場が混乱する」との判断から一連の経緯について公表しない事を決めると共に、ミズノ社にも公表を控えるように要請した。
- ・こうした経緯については、加藤コミッショナーは一切承知しておらず、下田事務局長の独断で行われたものである。

というのですが、翌日以降の報道は、当然とはいえ、総じてNPBの対応に批判的です。

なお、下田事務局長は前日の記者会見で、「変更は加藤コミッショナーの了承のもとで行った」と発言していましたが、加藤コミッショナーとの会見の際には、「前日は混乱していた。申し訳ない」と訂正しています。こうした混乱も、NPBに対する不信感を増幅させています。

「今年の統一球は良く飛ぶ」という事はプロ野球の選手等関係者の間で噂になっていました。しかし、加藤コミッショナーはこれまで「ボールは変更していない」と公の場で発言して来ており、記者から責任問題に話が及ぶと、加藤コミッショナ

ーは、「隠蔽する意図はなかったし、不祥事とは感じていない。今後、事務局のガバナンスを強化する。」という答えに終始しています。

一連の経緯について加藤コミッショナーが何も知らされていなかったとすれば、誠に風通しの悪い組織であり、組織としての意思決定や合意形成のシステムに欠陥があるといわざるを得ません。加藤コミッショナーが「ガバナンスの強化」と発言したのはそうした組織的な問題を指しての発言だったと思われませんが、私はむしろ、「貴方自身のガバナンス（統治能力）が問われている」と指摘して置きたいと思います。

こうした加藤コミッショナーや下田事務局長の発言に対して、選手からは「事前に公表すべきだった」と不満の声が上がっていますが、打率や防御率などの成績が年俵や選手生命にも直結するだけに、それはもっともな事です。

飛ばないボールであれ、飛ぶボールであれ、事前に分かっていたら、選手はそれに対応すべく調整する事になりますから、シーズン前、少なくともオープン戦の前には統一球の変更を説明すべきだったと思います。

統一球が「飛び難い」とか「飛び易い」というのは、私にとってさしたる関心事ではありませんが、一定の反発係数を基準とする統一球を導入した以上、それは、公式競技のルールですから、仮に反発係数を変更するのであれば、ルールの変更として選手はじめ関係者にきちっと説明する必要があるでしょう。選手の知らない内にルールが変更されている等というのは公式競技の世界では有り得ない事であり、グラウンドで真剣勝負をしている選手たちをないがしろにしているといわざるを得ません。

また、下田事務局長は、昨シーズン行ったボール検査の際、反発係数が下限を下回るものがあったとしています。それが調整を必要とする程の状況だったとすれば、昨シーズンは不良品のボールで試合をしていた事になってしまいます。もしそうであるなら、昨シーズンの公式記録はどう評価されるべきなのでしょうね。今回の問題よりも、不良品が出回っていた昨シーズンの方が、余程深刻な事態だったのではないのでしょうか。

この事について、加藤コミッショナーは、統一球について基準値を下回るものがある事実は知っていたが、特段「おかしいとは思わなかった」としています。もしこの発言が事実なら、加藤コミッショナーは、1球1球に自身の名が刻印されている事の重さを自覚していないのではないかと感じてしまいます。

選手やファンを大事にしてのプロ野球であり、プロ野球あつてのNPBである事をもう一度思い出して欲しいと思います。（塾頭：吉田 洋一）